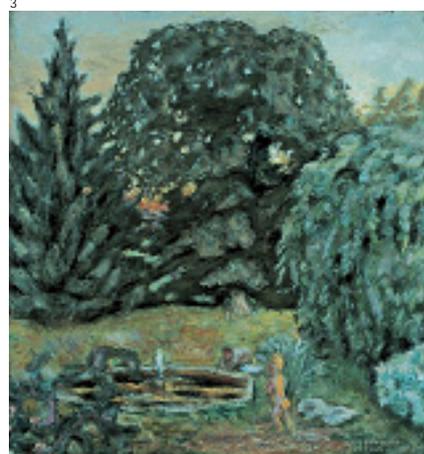
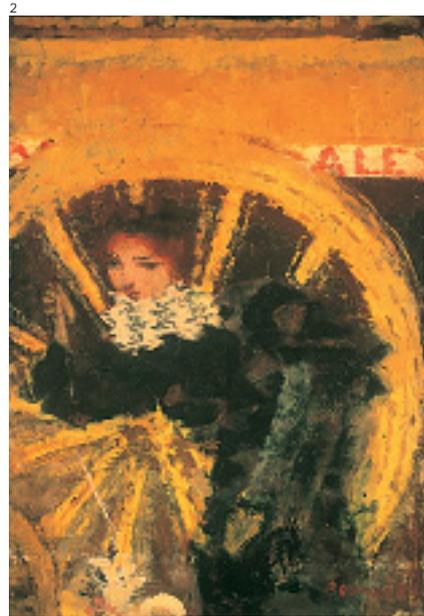
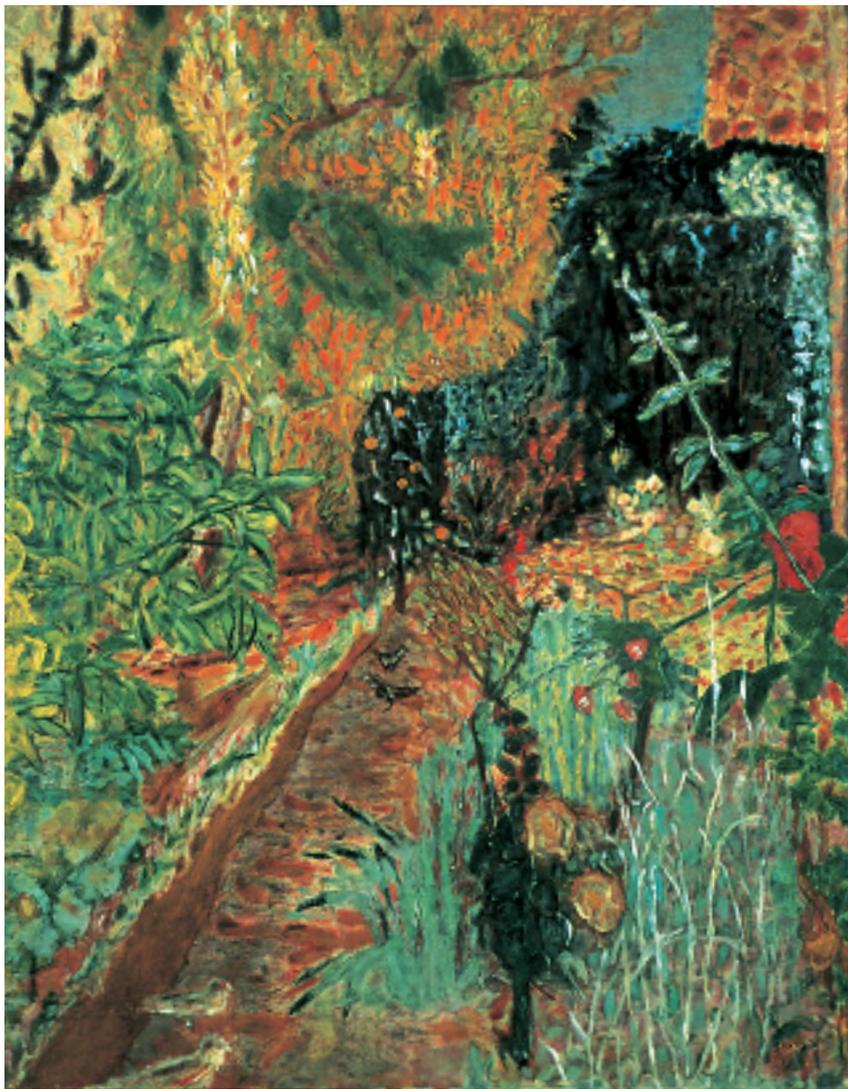


NEWS

SEIJI TOGO MEMORIAL
SOMPO JAPAN MUSEUM OF ART



- 1 《庭》1936年 パリ市近代美術館
©ADAGP, Paris & JVACS, Tokyo, 2004 ©Photothèque des Musées de la Ville de Paris
- 2 《乗合馬車》1895年頃 個人蔵
©ADAGP, Paris & JVACS, Tokyo, 2004
- 3 《ル・グラン = ランにて 公園》1902年 個人蔵
©ADAGP, Paris & JVACS, Tokyo, 2004

ピエール・ボナール

彩られた日常

2004年4月29日 木祝 — 6月30日 水

高村光太郎展

彫刻、絵画、書——「いのち」の造型

2004年7月7日(水)

8月29日(日)



《白文鳥》木彫 昭和5年(1930)頃、木彫・着彩 撮影:高村規



大正15年43歳、駒込林町のアトリエで



《裸婦坐像》大正6年(1917) 塑造 / ブロンズ 撮影:高村規

「僕」の前に道はない / 僕の後ろに道は出来る」と始まる『道程』。妻への愛と、その発病から死までを見つめた『智恵子抄』。高村光太郎(1883-1956)の名は、この二つの詩文集によって親しまれている。しかし美術史上では、近代的彫刻の開拓者の一人として重要な位置を占め、光太郎自身も自分が「内面から彫刻家的素質に貫かれている」と述べている。父親は明治木彫界の重鎮、高村光雲。その長男として幼少から家職をつぐことを当然とされた、自ら言うところの「宿命的な彫刻家」であった。

とはいえ、優れた技術と庶民的な性格をあわせもつ、いわゆる江戸の職人氣質といわれる光雲とは対照的に、光太郎は知識欲旺盛な明治青年の気質を持ち、さらに三年間の留学によって、消化しきれないほど複雑な内面性を抱えこむ。パリの自由な空気、自立した男女の恋、異質な美意識に支えられた大聖堂や彫刻。ところが、帰国後の生家や美術界には、職業美術家として彫刻を受注するシステムはあっても、混沌として膨れ上がった内面を、静かに整理し、表現に結びつけたいという欲求についての理解は乏しかった。光太郎は、生活の糧を得る手段と自己の探求との接点を探って苦心し、その過程で、当時まだ珍しかった画廊経営の試みや、数年間の油絵制作、優れた木彫家としての資質を証明する木彫小品、人体部分のブロンズ彫刻などが生み出された。

ひとり自分の内面と対峙しようとする姿勢は、鑑査のある展覧会を拒む方針となり、智恵子との個

を尊重した結びつきを生み、戦後には戦意高揚の詩作を反芻しつつ山に籠るという「自己流謫」となって、生涯にわたり貫かれている。そのようにして磨きつづけた内的なものがその時々作品に表れたものを、光太郎は「詩魂」「いのち」と呼び、ジャンルを問わず作品を生かす美の源泉とみなした。もっとも、光太郎の詩文は、彫刻の造型美を純粹に保つために、言葉で表せるものを切り離した結果だという。光太郎にとって彫刻とは、すべてを触覚的、立体的にとらえる世界観のことであり、自分の感性の中核であった。つまり光太郎の「詩魂」の核心は、彫刻作品の中に結晶しているといえる。

残念ながら、自分のために粘土で作っていた塑像の多くは、戦火で失われた。しかし昨年、長い間行方が知れなかった木彫の《榮螺》*が再発見され、メナード美術館に収蔵されたこともあり、光太郎の造型世界はあらためて注目を浴びている。この展覧会も、稀少な彫刻と絵画を約90点集め、書とあわせて、彼の造型美にふれる場とすることをめざしている。また、光太郎のルーツとしての光雲の木彫を10余点、また妻の智恵子が病床で作り、光太郎だけに見せたという「紙絵」20点もあわせて展示し、光太郎の造型世界を多角的に紹介する。

社会的な生と、内面的な生。現代の我々にとっても、このふたつの生のバランスをとりつつ内面の充実をはかることは、切実でもあり、困難でもある。光太郎の不器用だが一貫した生き方は、今なお有効な問いを投げかけてくる。

*《榮螺》は、第一会場の福島県立美術館のみ、期間限定で展示されます。

ギャラリートーク... 学芸員が展示作品について解説します

【一般対象】7月17日(土) 8月21日(土) 13:30~

【小中学生と父母対象】7月31日(土) 8月3日(火) 13:30~

2004年4月29日(木・祝) 6月30日(水) ピエール・ボナール 彩られた日常

室内や戸外の風景など、日常的な光景を鮮やかな色彩で描いたフランスの画家、ピエール・ボナールの作品を、初期から晩年まで、個人蔵を含めた国内外に所蔵されている作品を一堂に展示する。

月曜休館(但し、5月3日は開館) 午前10時～午後6時(金曜日は午後8時まで) 入館は閉館の30分前まで

入館料:一般1000円(800円)、大学・高校生600円(500円)()内は前売りおよび20名以上の団体料金/シルバー(65歳以上)800円/中学・小学生無料

7月7日(水) 8月29日(日) 高村光太郎展 彫刻、絵画、書 「いのち」の造型

詩集『道程』で知られる光太郎は近代彫刻の開拓者の一人。寡作・焼失により稀少な彫刻作品を中心に、絵画や書もあわせて芸術的探求を紹介。さらに、父・光雲の木彫と、妻・智恵子の紙絵も参考展示する。

月曜休館(但し、7月19日は開館) 午前10時～午後6時 入館は5時30分まで

入館料=一般1000円(800円)、大学・高校生600円(500円)()内は前売りおよび20名以上の団体料金/シルバー(65歳以上)800円/中学・小学生無料

9月4日(土) 10月24日(日) ピカソ展 幻のジャクリーヌ・コレクション

ピカソの最後の妻ジャクリーヌ秘蔵コレクションより130点(油彩60点、水彩・素描67点、彫刻3点)の作品を展示する。ほとんどの作品が日本初公開。

月曜休館(但し、9月20日、10月11日は開館) 午前10時～午後6時(金曜日は午後8時まで) 入館は閉館の30分前まで

入館料=一般1000円(800円)、大学・高校生600円(500円)()内は前売りおよび20名以上の団体料金/シルバー(65歳以上)800円/中学・小学生無料

10月1日(金)は「お客様感謝デー」として無料開館いたします。

10月30日(土) 12月5日(日) 第26回損保ジャパン東郷青児美術館大賞受賞記念 佐野ぬい展

損保ジャパン東郷青児美術館大賞の第26回目の受賞者、画家佐野ぬいの受賞記念の個展。

月曜休館 午前10時～午後6時 入館は5時30分まで

入館料=一般500円(400円)、大学・高校生300円(200円)()内は20名以上の団体料金/中学・小学生無料

選ばれた新進作家たち 第23回損保ジャパン美術財団選抜奨励展 入賞作品報告

損保ジャパン美術財団では、第23回選抜奨励展(3月17日～4月23日)に先立ち、3月8日に全出品作(平面作品部門64作家64作品、立体作品部門19作家19作品)を対象に各賞を決定する審査会を行いました。審査員は寺坂公雄、瀧梯三、田中通孝、真室佳武、和田義彦、佐野ぬい、淀井敏夫、澄川喜一の各氏に財団関係者2名を加えた10名。入賞作品は下記のとおり。

平面作品部門

損保ジャパン美術賞

権藤信隆《現》油彩・アクリル・テンペラ

秀作賞

小島隆三《破壊と創造》アクリル

藤田祥《鼓動》油彩

田中宏治

《The Foam in being Square》油彩・アクリル

立体作品部門

新作優秀賞

矢野真《輪廻 1507》構・エポキシ樹脂

新作秀作賞

松田重仁《日月樹》構・真鍮・箔

木裳耕二《Back Stage #4》石



権藤信隆《現》

第27回損保ジャパン東郷青児美術館大賞は池口史子《ワイン色のセーター》に決定



池口史子《ワイン色のセーター》

前回より名称が新しくなった損保ジャパン東郷青児美術館大賞、第27回目の受賞作は、池口史子(いけぐち ちかこ)氏の《ワイン色のセーター》(油彩・キャンヴァス、145.5×112.1cm [80F])「2003両洋の眼展」出品作に決定いたしました。池口史子氏は1943年旧満州大連生まれ、東京芸術大学で学び、同大学院修了後は立軌展、安井賞展、日本秀作美術展のほか、数々の個展、招待展で優れた作品を

発表されています。異郷の風景、静物、花をテーマに侘しさと明るさが混在する神秘的な世界を創出、また近年では今回の受賞作《ワイン色のセーター》に見られるように、人物という新たな境地を開拓されています。授賞式は2004年6月、受賞記念展は2005年秋に開催を予定しています。

ゴッガン《アリスカンの並木路、アルルの貸出中(2004年6月中旬まで)》
ホルル美術館蔵のゴッガンを展示



ポール・ゴーギャン
《タヒチの浜辺の女たち》
1891/94年
ホルル美術館蔵

TOPICS

長島美術館開館15周年記念「東郷青児展～女人礼賛～」開催報告 2003年11月1日～11月30日 長島美術館(鹿児島市)

長島美術館は、西鹿児島駅ちかくの丘の上につつ、亜熱帯樹の庭園が美しい美術館です。眼下に市街と海をはさんで正面にのぞむ桜島は、晴れた日にはまさに絶景で、ここは東洋のナポリともいわれます。長島商事グループの創立者・長島公佑氏が蒐集した西洋絵画と洋画、彫刻、陶磁器などを収蔵しています。青児は明治30年(1897)鹿児島市で「檜の東郷」ともいわれた東郷家に生まれ、5歳のとき一家で東京するまで鹿児島に暮らしました。今回の企画は郷土出身の洋画家とし

て青児を紹介するもので、損保ジャパンと損保ジャパン東郷青児美術館が収蔵する油彩50点、素描12点、彫刻3点、タピスリー1点を展示し、会期中無休の30日間で、入場者は9,818人でした。



損保ジャパン東郷青児美術館の常設展示作品の一枚、ポール・ゴーギャン作《アリスカンの並木路、アルル》(1889)が、アメリカ・ハワイ州のホルル美術館で開催の「日本とパリ:印象派、後期印象派と近代」展(会期2004年4月8日～6月6日)に出品されています。この期間6月中旬まで、ホルル美術館蔵のゴッガン《タヒチの浜辺の女たち》(1891/94)が、損保ジャパン東郷青児美術館に貸し出され、常設コーナーに展示されています。

Pierre Bonnard 彩られた日常 ピエール・ボナール

2004年4月29日(木・祝) — 6月30日(水)

アンティミスト(親密派)の代表的な画家であり「色彩の魔術師」と呼ばれたピエール・ボナール(1867~1947)には、印象主義の継承者というイメージがある。19世紀末の前衛的な芸術家グループ、ナビ派の一員として出発したボナールは、1890年代には日本美術の影響を受けながらポスター、挿絵、デザインなど装飾芸術を手がけ、流麗な線を用いた渋目の色調で作品を制作していた。しかし世紀末に近づくにつれ印象派の技法を思わせる分割した筆致を使い初め、20世紀に入ると色調も明るさを増してゆく。街角を行く人々、室内、静物、南フランスの風景など、身近な主題と明るい色合は印象派の作品を彷彿とさせる。

だが、印象派の画家たちが自然や光の変化に忠実であったのに対し、ボナールは描く対象から一線を画していた。「絵画にふさわしいひとつの方法、つまりひとつの大きな真実のためにいくつもの小さな嘘を重ねるこ

と」^{〔注1〕}というボナールの言葉が示しているように、自然を再現しようとする意図はボナールにはない。ボナールの作品において色彩と形態は再構築され練り上げられ、時には抽象絵画のような趣を呈する。ボナールのこの制作態度は、同じナビ派の一員であったモーリス・ドニの20世紀絵画の方向を示唆した有名な言葉を彷彿とさせるのである。「絵画はもともと、戦闘場面の馬や裸婦、あるいは何か逸話的なものである以前に、ある秩序に従って色彩を施された平面なのである」^{〔注2〕}。

2次元の平面として再構築されたボナールの作品に展開するのは、平凡な日常に潜む美しさとそれに魅了された画家の感覚である。晩年のボナールは次のように語っている。「対象やモチーフの存在は画家にとって、制作中には極めて邪魔な存在である。絵画の出発点はひとつの理念であるから、もし対象が制作中にそこにあると、直接的な視覚の

ギャラリー・トーク

学芸員が展示作品について解説します

【一般対象】

5月8日(土) 13:30~

5月14日(金) 5月21日(金) 6月4日(金) 17:30~

【小中学生と父母対象】

5月15日(土) 5月29日(土) 13:30~

結果に左右されて、最初の理念を見失ってしまうという危険性が常につきまとう」^{〔注3〕}。自然を永遠のものにしたのが印象派であるならば、あえて対象から離脱し、最初の記憶を永遠のものにしたのがボナールと言えるだろう。ボナールは生涯を共にした妻マルトをモデルにした作品を数多く残しているが、描かれたマルトはその死の前年ですら、みずみずしさを湛えている。

本展覧会では国内外の美術館や個人所蔵家より集められた油彩、版画、水彩、スケッチなど、初期の作品からナビ派時代の装飾的な作品、そして次第に明るさを増し抽象絵画を思わせる晩年の作品まで約70点を一堂に展示する。

〔注1〕Bonnard (Les Classiques du XX^e siècle), Centre Georges Pompidou, Paris 1984: p.199

〔注2〕Maurice Denis. *Théorie: du symbolisme au classicisme*. (Paris: Hermann, 1964) p.33

〔注3〕Pierre Bonnard. "Carnet de Bonnard." *Verve: Revue artistique et littéraire*. 5 (Paris: Édition de la Revue Verve, 1947), pp.17-18

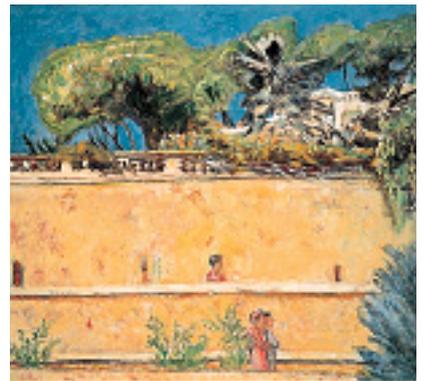
©ADAGP, Paris & JIVACS, Tokyo, 2004



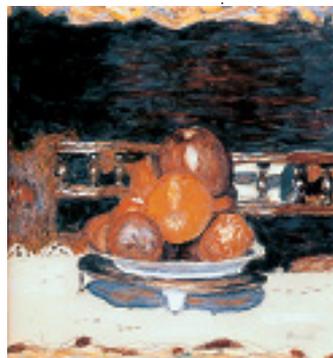
1 《花売り》1905年頃 個人蔵
2 《踊る犬た女 家具のデザイン》1891年 個人蔵
3 《南フランスのテラス》1925年 個人蔵
4 《果物、濃い調和》1930年頃 ルーヴル美術館(オルセー美術館寄託)
5 《南フランスの風景》1941年頃 個人蔵



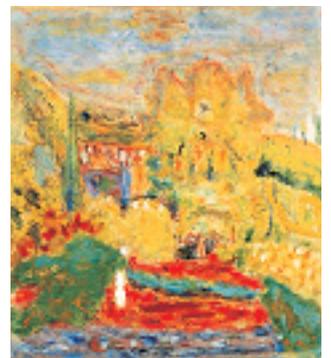
2



3



4



5

NEWS

お問い合わせ先 ハローダイヤル 03 5777 8600

財団法人 損保ジャパン美術財団 損保ジャパン東郷青児美術館

160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1 損保ジャパン本社ビル42階

電話 03(3349)3081[代表] / ファックス 03(3349)3079

ホームページ = <http://www.sompo-japan.co.jp/museum/>

交通 = JR新宿駅西口、丸ノ内線新宿駅・西新宿駅、

大江戸線新宿西口駅より徒歩5分

損保ジャパン東郷青児美術館ニュース No.31

発行日 = 2004年4月15日

発行 = 財団法人損保ジャパン美術財団

損保ジャパン東郷青児美術館

製作 = 求龍堂 デザイン = 若林純子

印刷 = 凸版印刷株式会社

R100
凸版印刷100周年記念事業